OECD（経済協力開発機構）

事務総長　落合中学校へ来校

３月２日（水）OECD 事務総長教育政策特別顧問アンドレア・シュライヒャー（Andreas Schleicher）氏が落合中学校に来校されました。1997 年の PISA 調査の開始からの国際的な総括責任者です。

お話によると、2009 年の PISA 調査結果から、日本は前回の調査結果における課題に対する取組がすすみ、OECD 加盟国の中で一番改善が図られているということでした。また、日本の生徒は知識・技能を習得する力は大変優れているが、知識・技能を実際の場面で活用する能力が課題である。そのためのコミュニケーション能力、言語活動の充実が必要であるとのことでした。

OECD－PISA 調査

（ピザ調査：生徒の学習到達度調査）

2000 年以降３年ごとに実施され、2009 年には読解力を中心とする第４回目の調査が実施された。世界各国の教育政策、教育界に大きな影響をもたらしている。

当日は学校概要の説明のあと、本校のＥＳＤ（持続発展教育）の実践紹介、生徒会長・副会長による生徒会を中心とした「国境なき楽団への取組」や国際交流活動の説明、また言語活動を重視した１年生全クラスと５組の授業、そして多摩市における初の取組である WEB 授業（ニュージーランドの小学校とのリアルタイムでの国際交流）を参観されました。

アンドレア・シュライヒャー氏は、PISA 調査結果における日本の現状を認識しながらの来校であったが､本校の取組や生徒の学習活動を視察して｢私の日本の学校に対する認識は、以前の結果から一段と改善がみられ、日本の学校訪問を楽しみにしていた。本日もまたとても良い実践を直接みさせていただき感謝しています。落合中生徒の学習活動も素晴らしい｡」というお褒めの言葉をいただきました。また、国際社会で通用する能力としては、「単に知識を得て、知識に頼るという能力は過去のものであり、通用しない。今後は知識を構成する能力、創出・創造する能力が必要である」とおっしゃっていました。